目次

解説……七
補註……二七
井原西鶴略年譜……二九

胸算用序……一六
胸算用巻一……一九
一　問屋の寛濶女……二
二　長刀はむかしの鞘……二七
三　伊勢海老は春の艶……五〇
四　鼠の文づかひ……六六

胸算用巻二……六
一　銀壱匁の講中……九
二　訛言も只はきかぬ宿……九六
三　尤始末の異見……一〇七
四　門柱も皆かりの世……一三

胸算用巻三……一三
一　都の顔見せ芝居……一三五
二　餅ばなは年の内の詠め……一四八
三　小判は寝姿の夢……一六三
四　神さへ御目違ひ……一七五

胸算用巻四……一八七
一　闇の夜のわる口……一八八
二　奈良の庭竈……二〇一
三　亭主の入替り……二一
四　長崎の柱餅……二三三

胸算用巻五……二三六
一　つまりての夜市……二三七
二　才覚のぢくすだれ……二五一
三　平太郎殿……二六三
四　長久の江戸棚……二七八

重要語句索引……二九五

解説

井原西鶴が「世間胸算用」を発刊したのは元禄五年（一六九二年）で、年齢五十一歳、死没する前年であった。それゆえ生存中の作品では、絶作ということができる。同じ町人物といわれる「日本永代蔵」が出たのは元禄元年、すなわち四年前のことで、この元禄元年には、ほかに「武家義理物語」「新可笑記」「好色盛衰記」があり、また二年には「本朝桜陰比事」があったが、急に筆力が衰え、元禄三年にはほとんど何も発表していない。四年わずかに「嵐無常物語」「椀久二世の物語」といった西鶴作と認定せられる作品を発刊しているけれども、あまり覇気のある作品ではなかった。

元禄三年四年彼が活躍しなかった理由については、いろいろな推測ができるかも知れないが、一つには彼の病気ということも考えられる。ただし病気が何であったかは分らない。肺結核だったという説もある。しかし真偽不明である。とにかく二年間の停滞ののちに、この絶作といわれる「世間胸算用」を発表したのは、彼の並々ならぬ努力を語るものであり、また偉才の最後の光芒ともいえるものであった。しかもそれは大晦日をテーマにするという前人未踏の作品であり、内容また偉才の最後作にふさわしい傑作であった。この一作をもってしても、西鶴の名は永遠に記念せらるべきであると思う。

有名な割に西鶴の伝記は不明である。元禄六年（一六九三年）八月十日数え年五十二歳で没した彼の生年は、逆算すると寛永十九年（一六四二年）になるが、大坂に住んでいたというだけで他はあいまいである。ただ伊藤梅宇の「見聞談叢」（日本芸林叢書）の記事に、西鶴に触れたものがあり、それが現在伝記の

しても楽しみあり」（本朝二十不孝・二の一）などと同類の逆説。（一九）書出し―勘定書き。請求書。（二〇）済さぬ―済さ、は前出（注一二）。（二一）昼盗人―善良な市民のような顔をして悪事を働く者。（二二）年中の高ぐゝりは、大ざっぱに見積ること。胸算用せぬ―商人として実践すべき計算的合理意識に欠けることを言ってある。高ぐゝり、は算用、算用合に同じ。計算あるいは決算すること。具体的には、帳簿に金銭の収支・貸借を一々記載し、月末に決算をすること。「盆・正月（＝盆前と正月前即ち大晦日）二度の勘定済みたる事成とも、油断なく爰を改めて、毎月晦日に算用あひ（＝収支決算）聞ば」（西鶴織留・六の四）。なお、序文「胸算用油断なく」の項（一七頁注七）参照。（二三）つばめのあはぬ―つばめ、は燕算用。動詞「つばめる」の連用形の名詞化したもの。収支決算。ぬ、は打消の助動詞。（二四）小づかひ帳―小遣ひ帳。小銭の支払いを記す帳面。

鑑賞　この一篇は、貧しい長屋の人々の生活の様子と、質屋の話とが主眼になっている。長屋の人たちは、貧乏にうものが無いのである。大晦日の模範生ともいうべきだ。西鶴一流の皮肉な見方がここにあらわれている。

元禄五年元旦に日蝕があったという。一つの忠実な記録である。

一さる程に、大晦日の暮方まで不断の躰にて、正月の事ども何として埒明る事ぞと思ひしに、それ〴〵に質を置ける覚悟有て、身仕廻するこそ哀れなれ。一軒からは、古き傘一本に綿繰ひとつ、茶釜ひとつ、かれこれ三色にて、銀壱匁借て事すましける。又其隣には、かゝが不断帯、くはんぜこよりに仕かへて一すじ、男の木綿頭巾ひとつ、蓋なしの小重箱一組、七つ半の筬一丁、五合升壱合升二ツ、湊焼の石皿五枚、釣御前に仏の道具添て、取集て二十三色にて、壱匁六分借て年を取ける。其ひがし隣には舞〳〵住けるが、元日より大黒舞に商売を替ければ、五文の面、張貫の槌ひとつにて、正月中は口過すれば、此烏帽子ひたゝれ大口はいらぬ物とて、弐匁七分の質に置て、ゆるりと年を越ける。

下層階級の妻を言う。（七）くはんぜこより―観世紙縒。紙縒りの帯は貧しい女が締めるものであった。能役者観世又次郎が創案したので、この名ありと言う（男色大鑑・二の一）。（八）男―夫のこと。（九）七つ半の筬―筬、は機織り機具の付属具の一つ。薄い竹片を櫛形に連ねて作り、長方形の枠に入れたもの。経糸をその目に通して整え、緯糸を織り込むために用いる。糸四十本を一紀（＝算）とし、七紀半（三百本）の糸を通すものが七つ半の筬である。当時、機織りは縒の帯に締め替えて、（その）一筋と亭主の木綿頭巾一つ、蓋なしの小重箱一組、七つ半の筬一丁、五合升・一合升二つ、湊焼の石皿五枚、吊り仏に仏具を添えて、合わせて二十三品で（銀）一匁六分を借りて年を越した。その東隣りには幸若舞い（の大道芸人）が住んでいたが、元日から大黒舞に商売替えをするつもりなので、五文の面、張子の槌一つで、正月中は生計を立てるから、この烏帽子・直垂・大口袴は不要だとばかり、二匁七分で質に入れて、ゆったりと年を越した。

通釈　さて、（裏長屋の人々は）大晦日の暮れ方までいつもと変らぬ様で、正月の仕度などどうやって片づけるのかと思っていると、めいめい質入れする心あてがあって、（それによって、正月の）仕度をするのは、哀れという外はない。一軒からは、古い傘一本に綿繰り（車）一つ、茶釜一つ、合わせて三品で銀一匁を借りて、仕度を終えた。また、その隣りでは、女房がいつも締めている帯を観世紙

語釈・文法　（一）さる程に―接続詞。話題を転じたりする時に冒頭に置く語。さて、ところで。（二）埒明る―前出（一の一・三五頁注四）。明る、は下二段動詞。（三）身仕廻する―身仕廻、は身仕舞。身仕度、準備の意。ここは、正月の準備。（四）綿繰―綿繰車、の略。綿花をローラーの間を通過させて実と繊維とを分離する器械。実を除いた繊維を繰り綿という。（五）事すまし―すまし、はそのことをなしおえる、完了する、の意。前出（三九頁注一二）。ここは、正月の準備を済ませることを言ってある。（六）かゝ―嚊。（七）くはんぜこより―観世紙縒。（八）男―夫のこと。（九）七つ半の筬―筬、は機織り機具の付属具の一つ。薄い竹片を櫛形に連ねて作り、長方形の枠に入れたもの。経糸をその目に通して整え、緯糸を織り込むために用いる。糸四十本を一紀（＝算）とし、七紀半（三百本）の糸を通すものが七つ半の筬である。当時、機織りは